

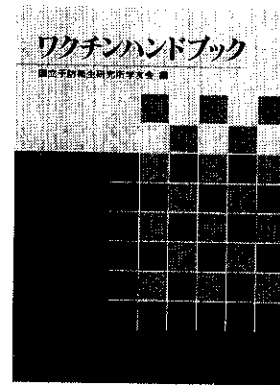
〈書 評〉

ワクチンハンドブック

国立予防衛生研究所学友会編

A 4 版 311頁 7,931円

丸善 1994年



本書は、国立予防衛生研究所学友会編による「日本のワクチン」の改訂版で、「ウイルス実験学」総論、各論とともに基礎および臨床の微生物学に携わる者にハンドブックとして作られた。著者は国立予防衛生研究所の研究者のみならず、ワクチンに関係ある他の研究機関および厚生省関係者を中心としている。

振り返ってみるとワクチンの歴史は Jenner による種痘をはじめとし、主としてウイルスの感染予防に役立ってきた。WHO は1970年末の天然痘の根絶の成功に踏まえ、現在はポリオをはじめとして6種類の感染症を対象としグローバルな予防接種拡大計画 (EPI) を展開している。

またわが国では1948年に予防接種法が制定され、公衆衛生面の改善とワクチン効果により幾つかのウイルスでは疾患の著しい減少がみられる。しかしながらインフルエンザワクチンのように流行を抑えるには困難なものもある。エイズのワクチンがもっとも緊急に期待されているが今のところ成功していない。ワクチン接種は効が大きい却不幸な事もあった。本書にはこれらのことについて率直に、簡潔に記述されている。

わが国ではワクチンの接種制度の見直しが考えられている。即ちいままでの義務接種から勧奨接種へ、さらにワクチンによる社会防衛に重点をおいた従来の集団接種方式から個別接種方式へと変換してきている。これらの点についても触れられている。

内容は第1編のワクチン総論として、ワクチンの思想、歴史、免疫、開発と認可、製造、品質保証、世界保健計画、改良・開発の展望を、第2編のワクチン各論として BCG ワクチン・ツベルクリン、百日せきワクチン、ジフテリアトキソイド、破傷風トキソイド、百日せき・ジフテリア・破傷風混合ワクチン (DPT)、コレラワクチン、ワイル病秋やみ混合ワクチン、肺炎球

菌ワクチン、インフルエンザb型菌ワクチン、髄膜炎菌ワクチン、ポリオワクチン、インフルエンザワクチン、日本脳炎ワクチン、麻疹ワクチン、風しんワクチン、おたふくかぜワクチン、狂犬病ワクチン、黄熱ワクチン、水痘ワクチン、B型肝炎ワクチン、はぶトキソイド、人免疫グロブリン、これからのワクチンとしてA型肝炎、C型肝炎、腎症候性出血熱、デング出血熱、後天性免疫不全症候群(エイズ)、乳児嘔吐下痢症(ロタウイルス感染症)、マラリア、第3編の予防接種として予防接種の実際、一般的な禁忌、予防接種の法的基盤、事故救済、ワクチン接種機関について記載されている。各論では、個々のウイルスの要約、臨床と診断、病原体、疫学、予防とワクチンの役割、製品と性状、接種法、副反応、ワクチンの製造法、ワクチンの将来などからなる。すべて新しい知識が含まれている。

ワクチン接種法の見直しで、近々一部の書き直しが必要となるが、わが国でのワクチンの概要を知るには便利で、利用価値が高い。ただ微生物学の初心者にとっては専門的で少し難しいかもしれないが、参考文献および微生物の教科書等と併せて読めばより理解できると思われる。

ワクチンの専門家の著書であり、その経験から書かれた内容にはワクチン歴史の重み、考え方、将来への期待が感じられ、味わい深いものがある。国立予防衛生研究所のワクチン開発、品質管理および国際協力への役割が理解でき、わが国でのワクチン学の集大成とも言えよう。

牛島廣治 (衛生微生物学部)